

# 掲 示 板

2017年度第 4号 通巻第90号 2018年 3月 17日



カンムリカイツブリ 写真：中野敬二

**継続は力なり！フィールドレポーター調査が多くの方々に注目されています！**

今年はフィールドに出るのが億劫になる程寒い日が続きましたが、皆さんいかがお過ごしですか。12月に発行されたフィールドレポーター便り（カイツブリ調査）は、レポーターの皆さんのみならず、5社の新聞社から取材がくるほど多くの方々に注目されました。記事の詳細について知りたい方は、当館の交流室に遊びに来て下さい。フィールドレポーターの自然に対する素朴な視点が調査結果としてまとめられた時、その発見や驚きは多くの読者と共有できることを実感しました。前田さんのまとめられた調査結果は、実は研究者も注目していますので、次への発展があるかもしれません。昨年末から始まった「橋の名前を調べましょう」調査でも新しい発見きっとあるはず。2月3日（土）に開催した勉強会の時にも、湖東と湖西の川と橋の名前の関係について、面白いことが分かりそうな感じがしました。寒さの緩んだ時に是非、近くの橋についてレポートをお願いします。勉強会の様子は2-4ページをご覧ください。

また、2月17日（土）には当館にて「自然と人間との共生フェスタ in 滋賀」が開催され、スタッフの椛島さんがアキアカネ調査について発表しました。自分達の団体を紹介する発表が多い中、椛島さんは7年間に渡るアキアカネ調査の結果を報告するという“フィールドレポーターらしさ”を前面に押し出した発表でした。講評では、保全生態学の大家である鷺谷いづみ先生から「市民科学は世界的に注目を浴びているが、そのような活動を20年以上にわたり継続しているのは、本当に素晴らしいことです。」とお褒めの言葉をいただきました。レポーターの皆さんもこれまでの調査報告にまた目を通していただくと、懐かしい思い出がよみがえるかもしれません。

さて、今年度の掲示板はこれが最後ですが、みなさんフィールドレポーター更新票は提出されたでしょうか。はしかけも同時に入っている方は、はしかけの更新と一緒にフィールドレポーターの更新もよろしくお願い致します。来年度は5月にフィールドレポーター交流会を開催いたします。新しい発見を皆さんと共有できる日を楽しみにしております。

フィールドレポーター担当学芸員 大槻 達郎

☒ … 📖 … も く じ … 📖 …

	巻頭： 継続は力なり！	大槻達郎	P1	4	自然と人間との共生フェスタ	FRS 中野敬二	P8
1	「はしの名前を調べましょう」説明会	FRS 中野敬二	P2	5	自然と人間との共生フェスタ（2）交流会	FRS 中野敬二	P10
2	橋今昔つれづれ	草津 家猫	P5	6	びわ博リニューアル	大槻達郎	P11
3	カイツブリの仲間	近江心気郎	P6	7	お知らせ		P12

# 1. はしの名前を調べましょう説明会

\*フィールドレポーター調査勉強会\*

フィールドレポーター・スタッフ（FRS） 中野敬二

2017年度第2回フィールドレポート「はしの名前を調べましょう」の説明会が平成30年2月3日（土）琵琶湖博物館セミナー室で開催されました。

この日は殊の外寒く出足が悪いのではと心配しましたが、16名の出席者がありました。これに学芸員2名、勉強会担当スタッフ1名を加え全19名による勉強会になりました。

キッズ会員2名を含めたレポーター登録メンバーの参加ですが、年齢層でいうと10歳以下から80歳以上と幅広く、この日限定ですが、レポーターの若返りを感じる明るい会となりました。

**ま**ず、フィールドレポーター担当の大槻学芸員から本日の説明会の趣旨説明と内容の概略説明がされました。引き続き今日のテーマのひとつ目「橋の魅力と名前の不思議」という表題で北井学芸員の講座に入りました。

「橋」という身近なものでありながら、調査対象としては少し地味な感じであり、興味や関心をどこにもって行って、どうした取り組みを進めるべきか、迷っていたレポーターにとっては、はっきり視界が見えてきた内容でした。

橋の成り立ちには、形、名前の付け方、環境などいろいろな要素が組み合わさって出来上がっています。多くの要素はあるものの、着目点を1つ持つと、「橋」は面白い調査対象であるという内容の説明を聞いて、参加したレポーターが各自何かの勘所を押さえたような雰囲気でした。レポーターの基本である「実際に足を現場に運び、興味をもって自分の目と勘所で調査すること」の大切さを改めて感じました。



**引**き続き2つ目のテーマ「調査票の書き方を実施で学ぶ」です。今回レポートの立案を行い、今後集計やまとめを担当することになっている松村レポーターからの説明です。

先ず必ず見てもらいたい所とその記入方法が具体的に説明されました。

先に北井学芸員の講演を聞いた後なので、どう書くかと少し迷っていたレポーターもポイントがはっきり見えてきて頭の中の整理が進んだのではないかと推察できました。



**橋**の基本的な学習と、レポート作成のやり方を勉強した後は、一同館外に出て実地体験です。

思っていたより外は寒かったのですが、思い思いの防寒対策をして博物館進入路と湖岸道路の交差点のすぐ近く、「秋ノ川」にかかる「秋ノ川橋」を観察と、レポート記入を実践しました。

説明会の席でもらった解答用紙に思い思いに書き込んでいきます。観察の心構えがだんだん出てきました。

橋の銘板や位置、川上川下、長さ幅、材質等。



橋の化粧板も書いてください

思った以上に記入し報告する内容がこんなに多いの？というレポーターの感想が聞かれました。

中にはメジャーで橋の長さ、歩道幅を記録するベテランレポーターもいました。



ファミリーで参加してくれました！

**再**びセミナー室に戻ってからは、リラックスして交流会です。

テーブルをかためて、お茶を飲みながらざっくばらんに思っている事、自分のやりたいことを述べ時間の許す限りおしゃべりをしました。

早くも何カ所か観察したものの、まとめ方が難しい、何処まで書いたら良いのか迷う。といった実践報告もありました。

フィールドレポーターだけの交流会は今までに何回も実施されていましてしたので、今回は有意義な時間が持てたと思います。



写真：FRS 中野敬二



### 「明日に架けた橋の名前」をしらべること

フィールドレポーター調査担当：松村順子

今回の「橋の名前を調べましょうについて、「この調査の面白さは何ですか？」という質問がありました。正直に言うならば、初めからの答えをえたいままなのです。県内の120本もある1級河川、その周辺の小河川にかかる橋は、実に無数で、身近だからといっても、到底すべての橋を調べられるとは思えません。では、何故、名前を調べるのかといいますと、そもそもこのテーマのきっかけは、「ある橋を渡っていたら、橋の親柱につけられた名が行きは平仮名、帰りは漢字で刻字されている。」という投書から始まりました。そんな橋名板があったかしら？そもそも近所の橋など名前がついていた？日々の暮らしの中では、橋も川もごく普通の存在で、名前には無意識だと気が付いたくらいなのです。

そこで、気楽に普通の橋たちを調べてみることにになりました。調査項目には目新しい言葉もあり少々面倒かもしれませんが、でも、とりあえず橋の名を調査することで、橋の形、歴史、エピソード、構造や、芸術性、文化的価値などなど、必ずなにか発見があるはずと考えました。つまり、この調査の面白さは、未知数ということは確かです。何がどうであるのか、予測もつきません。

お送りいただく調査票の集計が楽しみです。

余談ですが、自重と車両の重さに強い「プレストレストコンクリート造りの橋梁の日本の第1号は、滋賀県に架けられ登録有形文化財です。自動車社会となった現在のほとんどの橋にこの工法が使われていることも、橋の歴史のひとつ。橋の歴板に記されています。そんなことも、名前を調べているうちに目につくようになりました。

それにしても、橋の名前はいったい誰が、どう考えてつけるのでしょうか。どうして無名なのでしょう。疑問ばかりが膨らんでいませんか？面白くないかもしれませんが、調べてみましょう。

あなたの身近の橋を架けた人々の思いや希望も一緒に探してみませんか？

イラスト：イラストや

## 2. 橋今昔つれづれ

草津 家猫

古来より人々は水辺に集い暮らししてきた、水は集落や国の境になることもある一方で水路は運搬にも利用されてきた。船での往来からやがて人や物の流れに便利な橋が架けられるようになる。

昨年橋の調査を模索しはじめた頃の旅先で、今も昔も暮らしのなかには様々な橋があるのだなぁと思いをはせた。今回の橋調査でどのような事が見えてくるのか楽しみでもある。



ベトナムの（来遠橋） 18m



1953年日本商人の街があった



橋中央にある寺（航海安全）



橋の出入口 今は観光で賑わう



カンボディア 屋根付き橋



橋で涼む人々



トルコ海峡の大橋 全長 1500m 吊橋



金角湾は魚釣りで賑わう海峡は潮流が速い

東南アジア旅行のFRからの投稿です。 文・写真 家猫さん

### 3. カイツブリの仲間

フィールドレポーター

近江心気郎

大津市におの浜は「鳩の浜」つまりカイツブリのいる浜ということです。

昭和50年代初めには浜大津界限でも普通に見られたカイツブリが平成に入りその姿を見せなくなり、日本野鳥の会の各年統計で見ても、2010年以降浜大津から瀬田の唐橋に到る湖西湖岸ではほとんど観察記録がないというさみしい状況です。

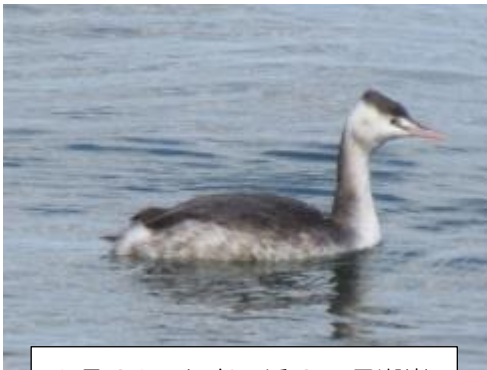
それでもわずかな希望をもってフィールドレポーター2017年度第1回調査「カイツブリに会いに行こう」に参加し4月から8月まで調査を行いました。

結果は想定を超える惨たんたるもので、渡り鳥の姿が見えなくなる8月などは、柳が崎から瀬田唐橋中之島までの湖岸約10kmに水鳥そのものの姿が全く見えないという期間がありました。

提出した報告は、いないいないレポートばかり。残念、無念の極みでした。

レポーターとしての満足感がないまま調査期間が終了しましたが、気を取り直し、その後折に触れ湖岸線を自転車で走りました。

秋の始まり頃やっとカルガモが姿を見せてくれる程度だったのが、年末にかけ常連の渡り鳥がやっと飛来すると湖面がやや賑やかになりました。



1月31日におの浜3丁目湖岸

開けて2018年1月。

見られる水鳥は、オオバン、ヒドリガモ、キンシロハジロ等でしたが、その中に白く輝き潜水を繰り返すカンムリカイツブリが見られるようになりました。

2~3羽の仲間もいますが、大体1羽の単独行動です。どちらかと言えば、湖岸に群がる他の鳥集団よりも沖を遊泳する姿が見えます。写真を撮ると冬毛で首が白くカンムリ羽が出かけているかな?と思える姿です。

とにかくカイツブリと名の付く水鳥が「鳩の浜」とその周辺で観察出来るようになったのは望外の喜びと言って良く、この子達がいつの日か夏鳥に成長し北に帰る日が来るのか解りませんが、それまで継続的に観察して、カンムリ、や首のストールがどの様に整髪されて、ファッションが完成



2月7日におの浜1丁目湖岸

となるのか追いかけてみようと思いました。

1個体で追跡出来るとはっきりするのでしょうか、そんな技の持ち合わせがありませんので写真を撮りまくって2月、3月、4月、5月ファッションがどうなるのか追いかけます。

2月に入っても首の白さが目立つ状況は変わりませんが頭がカンムリらしくなってきたり、首筋が少し黒羽になっている子も出てきました。ドレスアップの始まりです

そんな観察をしていた2月2日、別の発見がありました。



盛んに潜水している鳥がいました。もしやカイツブリかと期待し写真を撮りました。頻繁に潜水するので撮影しにくかったのですが、幸い湖岸に近かったので何とか写真に収める事が出来ました。

家に帰って拡大画像にしたところ目が赤くカラダの白黒がはっきりし、カイツブリではないようです。

ネットで調べるとハジロカイツブリというのができましたが同じ仲間にミミカイツブリというのがあります。写真を博物館の亀田学芸員に見てもらったところ、目のあたり、即ち頬の白黒部分のもやもや感からハジロカイツブリに間違いのないとの回答をもらいました。この子は夏羽になるとカンムリが黒く立派になり、目の後ろの飾り羽場が金色になって別種のように見えるようです。尤もそのまえに帰ってしまうので立派な姿を琵琶湖で見る事は少ないそうです。

ただ今見つけているのはこの1羽だけです。

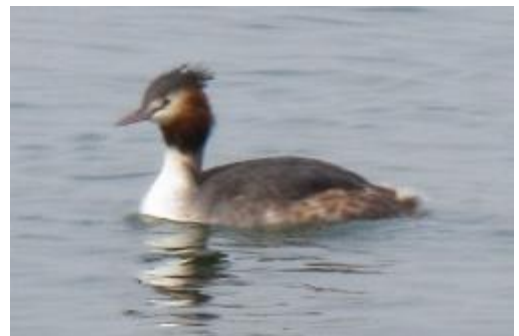
相当珍しいのかと調べたところ、琵琶湖北湖には大量に観察されるというレポートが日本野鳥の会滋賀支部の発行紙「におのうみ」に出ていました。それによると2535羽（2017年一斉調査・琵琶湖岸）となっています。但し同調査でも南湖では雄琴あたりには見られるものの、近江大橋西・東詰、草津川河口付近になると、ほとんど観察出来なかったと報告されており、カイツブリの生息状況とよく似た傾向があるようにも思えます。どこかに移動しないでずっといてくれるのを期待し、夏羽がしっかり見えるようになるまで帰らず、追跡がしっかりできることを切にねがいます。



2月7日におの浜2丁目湖岸

本家のカイツブリには巡り会えませんでした。はるばる来てくれたカイツブリの仲間のおかげで、におの浜が賑わっているのは嬉しい限りです。2月下旬になるとカンムリと、襟巻きがそれらしくなったおませな子も出てきました。

カンムリカイツブリもハジロカイツブリもどんな姿に着飾って、何月頃に北へ帰っていくのでしょうか。



2月24日におの浜1丁目湖岸

## ご報告

2017年度第1回調査「カイツブリに会いに行こう」は色々な発見があり、新聞掲載も右のように5紙を数え各方面で注目を集めました。精力的に調査していただいたレポーターの皆さんに感謝します。

また、素晴らしいまとめをもらったスタッフの前田雅子レポーター 大変お疲れ様でした。

### 新聞掲載（報道日順）

平成30年1月13日（土）中日新聞  
平成30年1月16日（火）産経新聞  
平成30年1月20日（土）毎日新聞  
平成30年1月23日（火）読売新聞  
平成30年1月23日（火）京都新聞

写真撮影・近江心気郎

## 4. 自然と人間の共生フェスタ in 滋賀（1）

FRS 中野敬二

平成 30 年 2 月 17 日（土）琵琶湖博物館ホールとセミナー室を使って盛大に開催されました。口頭発表は 4 時間の前後半にわけて 10 団体の代表が行いました。別室のセミナー室では、10 団体の代表による発表に加え、更に 10 団体がポスター展示を行いました。ポスター会場は、フェスタへの参加者だけでなく、一般の来館者も来場していたようです。会場では、熱心な質問に適切に回答する参加団体のスタッフの姿が見られました。報道関係者も見られ参加者は 130 名と発表されました。

### 自然と人間の共生フェスタ

#### 開催趣旨

『滋賀県やその周辺で、自然保護や緑の創出などを行う市民団体や花博記念協会が過去に助成した団体の発表の場を設け、情報の共有や協働のネットワークを促進し、共生の輪を広げる。また、催しを通じて、万博の理念である「自然と人間との共生」の普及・啓発につなげる。』  
出典

（国際花と緑の博覧会記念協会パンフレットより）



口頭発表は滋賀県の各地区における自然環境の保護や郷土の民族文化の保存維持に取り組む団体の代表によって活動経過、問題点の改善、提案を要領よく説明されました。15 分間の限定された時間にもかかわらず、全団体に共通しているのは、テーマや活動目標に向かって一途に精神誠意取り組む姿でした。いずれも苦勞して悩みながら少しずつ地道に活動し、やっと明るさが見えつつあるという段階での発表でなかったかと思えました。

それぞれの活動の中身を「多くの人に知ってもらいたいし、気にとめ、理解してもらえる人の数が少しでも増えることを望む」といった心のウチがヒシヒシと伝わる発表ばかりであったと感じました。

私たちのフィールドレポーター発表は後半部において「アキアカネ市民参加型調査」というテーマでRSの椋島昭紘さんが行いました。発表の前半には琵琶湖博物館のフィールドレポーター制度そのものと、開館以来の 20 年以上の活動実績と多様な調査内容を分かりやすく説明しました。

そして本題です。

2008 年から始まり毎年夏の山の調査、秋の調査を継続して続け今回で 9 回目を迎えるに到った経緯と結果を興味深くまとめた報告でした。夏、蓬萊山の定点でアキアカネにマーキングして頭数をカウントし、秋には麓の定点で同じく頭数をカウントしてその間の経緯解析発表でした。そのときの気象条件でカウント数は変動することを十分に説明できたと思います。



講評者からは、地道な調査にも関わらず、毎年一般の参加者を募り、勉強しながら楽しんで調査する集りが継続しているというのが素晴らしく、意義のある活動だという言葉頂きました。

またフィールドレポーター活動自体にも賞賛の言葉がありました。



同じ講評者からポスター展示会場で、少し耳新しい言葉ですが「市民科学」の実践例だと聞きました。

「このフィールドレポーター活動は、市民科学の典型で、欧米ではこのような活動が今注目されています。素晴らしい活動なので、もっとアピールして良いんですよ」という言葉を頂きました。

発表に対する熱心な講評

**市民科学とは...**林 (2015)によると、「一般の人々によって行われる科学であり、職業的な科学者や研究者と共同で行われることが多い」。この説明通りに考えると、市民科学とはフィールドレポーターの活動そのものと言える。ここ数年、大学や博物館に所属するアカデミア研究者を中心に市民科学を推進する声が高まってきており、種物学会や日本生態学会などの自然科学分野の学会では市民科学を推進するシンポジウムが開催されている。

**「出典」** 林和弘. オープンサイエンスをめぐる新しい潮流 (その5) オープンな情報流通が促進するシチズンサイエンス (市民科学) の可能性. 科学技術動向. 2015, no. 150, p. 21-25.

なるほどと思う反面、何だか大層な評価の言葉だなとも思います。

私たちのフィールドレポーター活動はもっと自由気ままに、興味の赴くまま活動するという融通性を持っていますし、成果は地道に調べていればそのうち形になるという認識が原点です。

成果を求めています、常に完全な満足で終わることが少ないのも事実です。それでも、実績らしきもの出たときの満足感と達成感はレポーターの共通認識でしょう。そのためにやってきたのだという思いの出る瞬間です。

べつに「市民科学」を意識して活動したわけでは無いですが <ちょっと気取ってみました>、それが成果なのだ、長く継続しているのが良いことなのだと言う評価を頂いたわけです。

レポーターの皆さん素直に喜びましょう。

写真・FRS 中野敬二

## 5. 自然と人間の共生フェスタ in 滋賀

「パネル展示と交流会」

FRS 中野敬二

### 交流会

昼間の口頭発表終了後セミナー室で交流会が行われました。発表者、発表スタッフ、フェスタ開催スタッフ、びわ博学芸員をまじえて70～80名参加の会となりました。

ジュースでの乾杯の後は自由に交流が始まり何カ所かのテーブルに準備されたスナック菓子を頂きながら経験談、苦労話、に花が咲き、あちこちで歓声起こるような和やかな雰囲気での会でした。

開催日前後は全国的に寒波のまっただ中に有り、福井県の敦賀・あわら、小松各市から参加して下さった方は大変だったと思います。「こちらにきて久しぶりに雪のない山、黒い道を見た」と言っておられる参加者の声を聞きました。本当にお疲れ様でしたと申し上げたいと思います。



色々な話が盛り上がっていましたが1時間というのは思いの外短く、参加者全員若干の名残惜しさを感じつつまたの再会を約束し交流会の終了となりました。

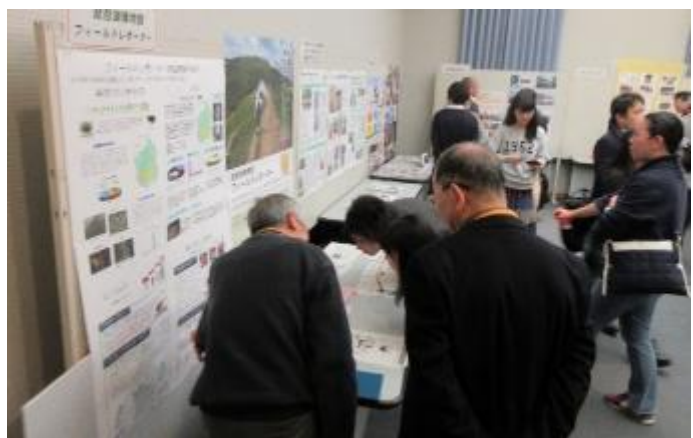
### ポスター展示会場

展示ブースには福井県からの3団体を含む20展示がありました。

中に、私たちが昨年訪問して勉強した敦賀市の「中池見湿地」から2つの活動団体ブース見られました。その他のブースでも複数の説明スタッフが待機し、参加者質問に用意したパンフレットや資料をつかって熱心に対応していました。

フィールドレポーターブースには本日発表テーマの「アキアカネ調査」のポスターを大きくメイン飾りました。

別パネルには、自然の生物調査として「ミノムシ」「イチョウウキゴケ」の2件、文化調査として「飛び出し坊や」「みちしるべ」がポスター展示されました。



写真・FRS 中野敬二

## 6. リニューアル工事が本格的に始まりました

FR 担当学芸員 大槻達郎

3月に入り、今年度もあとわずかとなりましたが、琵琶湖博物館は第2期リニューアルに向けて大忙しです。現在屋外の樹木が整備され、アトリウムから琵琶湖を眺めることができるようになりました。これは樹冠トレイルの制作が始まっているためですが、アトリウムの外にあったコンクリートの池も改修工事が始まっています。夕方になるとアトリウムでは、琵琶湖を背景に写真を撮る来館者の方が見られます。最近日も長くなり、閉館間際にはとてもきれいな夕焼けを見ることができます。工事が進むにつれて屋外の景色が大きく変わるとは思いますが、恐らくこのリニューアル中が、アトリウムから大空を眺めることができるはずです。お立ち寄りの際には、一枚記念に写真を撮ってみてはどうでしょうか。

また、12月1日には、ディスカバリールームと図書館が閉鎖されました。ディスカバリールームには、ザリガニの立体模型の中に入ってオタマジャクシを捕まえる「ザリガニになってみよう」や、おばあちゃんの家を模したコーナーがあり、これまでも多くの子ども達が楽しんでいました。来館者の中には、「子どもの頃によく遊びに来ていたが、大人になって自分の子どもを連れてくるようになった。」という方もいらっしゃいます。昨年琵琶湖博物館は開館20周年を迎え、世代がひとつ回り、子どもだった方はお父さんお母さんに、開館当時はお父さんお母さんだった方はおじいちゃんおばあちゃんになり、今でも琵琶湖博物館に足を運んでくれることを本当に嬉しく思います。是非、お父さんお母さんは自分の子どもの頃の体験を、おじいちゃんおばあちゃんは子どもや孫に、開館当初の博物館の思い出をお話してみてもいいのではないでしょうか。

さて、ディスカバリールームの中には、古代の生物の化石や生物の進化について展示してあるコーナーがあります。今から20年前に制作されたものですが、その当時としては、最先端の知見が取り込まれていることに驚かされます。かつて大型肉食恐竜は、尾を下につけている模型が主でした。昔の映画でいうところの「ゴジラ」のような姿を思い浮かべると良いかもしれません。ディスカバリールームに展示してある肉食恐竜のイラストは、しっかり尾を地面から立ち上げて、現在の恐竜図鑑に載っているような姿です。また、植物の進化のコーナーでは、クックソニア等、植物の形の進化を学習する時に重要な種がしっかり展示してあり、改めて当時の学芸員の造詣の深さに感服しました。

図書館は、土日の午後等に子ども達が図鑑を見に来ることや、子供連れの方が一緒に本を見てお話をしている光景が思い出されます。図書館はリニューアル後には「おとなのディスカバリー」という、おとなも観察や実験をすることのできる空間へと生まれ変わります。図書館の本は書庫に移動してしまうので、これまでのように本棚を巡って、様々なジャンルの本を見て回るのは難しくなります。もちろん、司書の方に書庫から本を取ってきてもらうことだけでなく、「おとなのディスカバリー」の中にも様々な図鑑がおかれることになるので、新空間ならではの図書の活用法を発見していただければ嬉しく思います。



## 1月～3月の活動報告

月	日	内容	参加者	主な議題・活動
1月	6日(土)	定例会	6名	①橋の調査進め方、まとめ方の検討
	20日(土)	定例会	8名	①アカトンボ調査発表、リハーサル ②橋の調査勉強会資料確認、スケジュール決定
2月	3日(土)	・勉強会 ・定例会	8名	①橋の勉強会と調査方法の実践学習会(19名) ②勉強会の成果確認
	17日(土)	発表会	6名	①自然と人間の共生フェスタ in 滋賀、口頭発表 ②ポスター展示参加、③交流会参加
3月	3日(土)	定例会	10名	①掲示板原稿締め切り最終調整 ②橋調査の進捗報告とまとめ方論議 ③次会調査テーマ探し
	17日(土)	定例会		①2018年度第1回フィールドレポーターテーマの検討 ②FR掲示板90号発送

## H30年 4月～6月の活動予定

日	時	内容	場所
4月	7日(土) 13:30～17:00	定例会	交流室
	21日(土) 13:30～17:00	定例会	交流室
5月	5日(土) 13:30～17:00	定例会	交流室
	19日(土) 13:30～17:00	交流会	生活実験工房
6月	2日(土) 13:30～17:00	定例会	交流室
	16日(土) 13:30～17:00	定例会	交流室

定例会は原則として第1、第3土曜日の13:30～17:00に琵琶湖博物館の交流室で行なっています。どなたでも参加できますので、どうぞお気軽にお越しください。見学も大歓迎です。なお、予定が変更になる場合があります。詳細は、下記の電話・メールで、琵琶湖博物館フィールドレポーター係までお問い合わせください。

### 編集後記

とても寒い荒れに荒れた今年の冬でしたね。勉強会、発表会当日も寒い日ばかりでした。それだけに春の到来は最高です。フィールドレポーターの皆さん、さあ、気合いを入れて外に出ましょう。暖かい陽光の下、縮みきった体中の筋肉をのばしつつ、レポート活動をずんずん進めて下さい。楽しい、濃い報告を待っています。



滋賀県立  
琵琶湖博物館  
交流センター  
〒525-0001 草津市下物1091  
TEL 077-568-4811(代) FAX 077-568-4850  
Email: freporter@biwahaku.jp

(編集：中野)